

共働きの父親の育児参加と育児ストレス

—就学前の子どもをもつ父親を対象とした質的研究—

芳澤宏樹(虎の門神経科 龍医院)

伊藤武彦(和光大学)

井上孝代(明治学院大学)

2008年9月14日・15日 応用心理学会

I. 問題

・育児に関する研究

育児に対して感じる不安やストレスは「育児不安」「育児ストレス」として、1980年代から現在まで、母親を対象に多くの研究がされている。そして、母親の育児研究に付随し、父親に焦点をあてた育児研究も近年増えてきている。

これまでの父親研究で明らかになっている主な点として、

- ①父親にも育児ストレスがある(冬木, 2005など)
- ②父親の育児ストレスに夫婦関係が影響している
(住田・藤井, 1998など)
- ③仕事と育児のバランスが重要である
(矢沢・国広・天童, 1999)

などがある。

Ⅱ. 目的

しかし、これまでの父親の育児研究においては質問紙調査による量的な研究が多く、質的研究がほとんどなされていない。

そこで本研究では、共働きの父親の育児参加と育児ストレスについて、これまでなされてこなかった質的研究を行い、父親の育児ストレスや育児に対する感情を具体的な語りの中から探索的に明らかにすることを目的とする。

Ⅲ. 方法

• 予備調査と本調査を設定

① 予備調査

父親1名を対象に半構造化面接を行い、先行研究から得られた父親の育児に関連する要因についての実際を確認する。

② 本調査

父親3名を対象にフォーカス・グループ・ディスカッションを行い、予備調査で得られた要因について焦点を絞り、具体的に明らかにする。

IV. 予備調査

○半構造化面接(50分)

先行研究から、「育児ストレス」「仕事が育児に与える影響」「夫婦間のコミュニケーション」についての質問を設定した。

○倫理的配慮

調査内容・面接の録音・守秘義務について説明し、了承を得た上で同意書に署名してもらい、面接者は誓約書を渡した。

○面接場所

A市にある子育てセンターの一室を借りて面接を行った。

○結果の処理

心理学専攻の大学院生3名でKJ法を参考に語られた内容を分類した。

IV. 予備調査

- 協力者の基本的な情報

年齢: 35歳

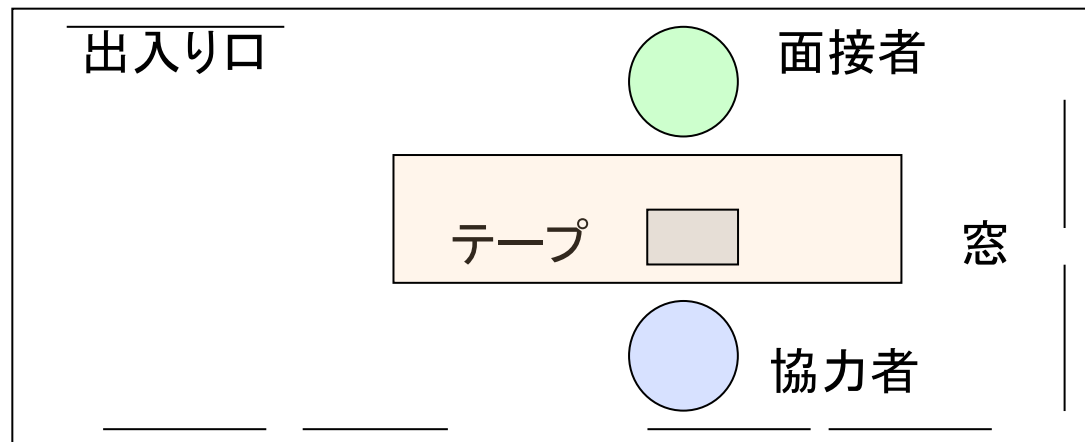
子どもの年齢と性別: 4歳 男児 (2歳から保育所)

職業: 会社員 (帰宅時間...23時頃)

休日: 土日祝日

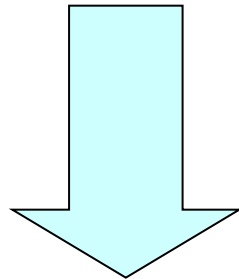
配偶者の就労状況: パート勤務

<面接状況>



予備調査から、

- ① 育児に対する肯定的感情が強いため、強くストレスを感じていない。(場面や状況が限定されている)
- ② 「夫婦での会話」が「育児ストレス低減要因」と「仕事
が育児に与える影響を抑える要因」に共通している。



「育児における肯定的感情」「夫婦関係」が育児
ストレスに影響していることが確認されたため、
本調査では詳細に聞く必要がある。

V. 本調査

○フォーカス・グループ・ディスカッション(130分)

予備調査から得られた「育児における肯定的感情」「夫婦関係」と「育児ストレスの有無」に焦点を当て面接を行った。

○倫理的配慮

予備調査と同様の説明に加え、協力者間においても面接で話されたことを口外しないようお願いをした。

○面接場所

A市にある子育てセンターの一室を借りて行った。

○結果の処理

録音した面接記録を逐語録とし、フォーカス・グループ・ディスカッションの分類方法に倣い分類した。

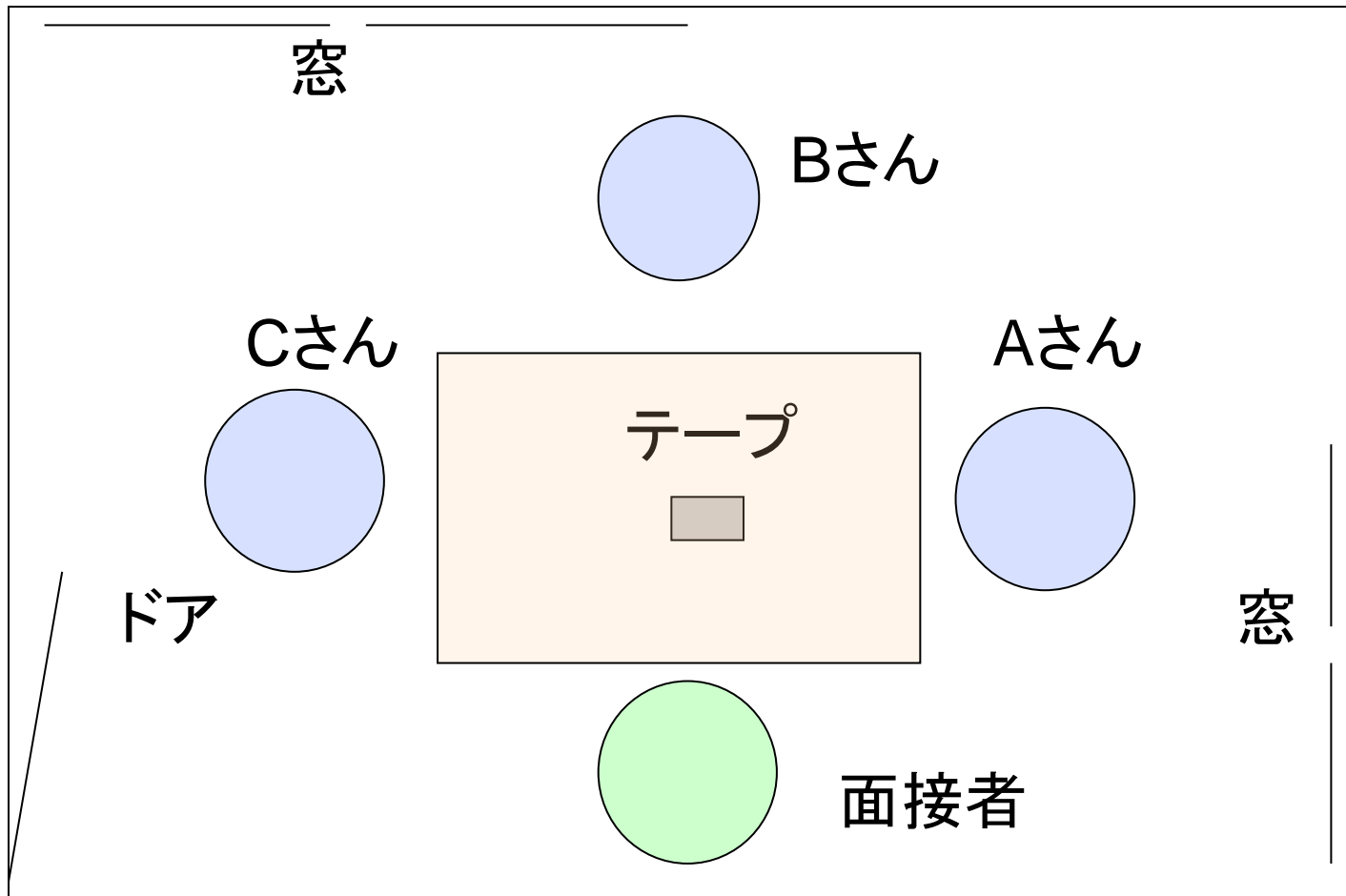
V. 本調査

● 協力者の情報

	年齢	職業	帰宅時間・家を出る時間	休日	子どもの年齢・性別	配偶者の就労状況	住宅状況
Aさん	35歳	会社員	21時 ～22時・ 7時	土曜・日曜・祝日 (仕事の場合あり)	4歳・男児 (保育園) 2歳・男児 (保育園)	正社員	一軒家 (4人暮らし)
Bさん	34歳	会社員	21時 ～22時・ 6時15分	土曜・日曜・祝日 (土曜は隔週)	2歳・男児 (保育園)	パート	一軒家 (3人暮らし)
Cさん	34歳	会社員	19時頃・ 7時30分	土曜・日曜・祝日	3歳・男児 (保育園) 7ヶ月・女児	正社員 (育児休暇)	一軒家 (父親の両親 と同居)

V. 本調査

- 面接状況



VI. 結果

子どもとの2者関係

↳ 肯定的感情があるため3人全員がストレスを感じないと回答

子どもの成長

歩く・しゃべる・他の子どもと関
われるようになった

喜び・楽しさ・嬉しさ

肯定的感情

子どもとの関わり

一緒に遊ぶ・作った物を見せてもらう・お
風呂に入る

育児ストレス低減



VI. 結果

妻・子ども・夫の3者関係

↳ 2人がストレスを感じるという回答

妻の子どもに対する接し方

そんなに怒らなくてもいいんじゃないか・厳しすぎだと思う

妻からの要望

妻の言うとおりにしようとしたが、子どもが嫌がるから困った・休日過ごし方

妻・子ども・夫の3者関係におけるストレス

VII. 考察

○父親の育児ストレスと育児に対する肯定的感情について

面接では、買い物や外食、一人での育児場面ではストレスを感じる事が語られている。しかし、そのような場面でストレスを感じてもそれ以上に育児に対する肯定的感情が強いため、相対的にストレスを感じていないということが協力者4名全員から語られた。

母親を対象とした先行研究(住田,1999、荒巻ら,2003)では、肯定的感情が母親の育児ストレス低減の要因となることが明らかにされており、本研究からは、父親においても肯定的感情が育児ストレス低減の要因となり得ることが示唆された。

さらに、「楽しい」と感じる育児行動が父親によって異なることが面接で語られていた。その要因として考えられるのが、「子どもの年齢」と「子どもの数」である。子どもが成長したり、子どもが一人ではなくなることにより、父親は子どもに対する接し方を変える必要があるため、楽しめる育児行動が異なるのだと考えられる。

VII. 考察

○妻・子どもとの3者関係における育児ストレス

父親は、妻の期待に応えようとする気持ちはあり、実行するものの、それがうまく出来るかどうかは子どもの反応が大きく影響すると考えられる。村松・大野(2005)では、初めて子どもを持つ父親は、妻の期待に応えるよう努力していることが明らかとなっている。面接からは、「母親の言うことは聞く」「どんなに怒られても子どもは母親につく」といったことが語られており、子どもの反応が父親と母親では異なっていることを体験している。つまり、妻の要望に応えようと行動するがうまくいかないことが実際にあり、それがストレスとなっているものと考えられる。

また、「妻の子どもに対する接し方」もストレスとなることが示唆された。「妻が子どもを怒っているのを見ると、疲れたり、ストレス溜まったりする」「子どもに対してあれこれダメって言いすぎ」といった語りがあり、妻と子どもの関わりにおいて間接的にストレスを感じているものと考えられる。

この3者関係における育児ストレスを低減させるには、夫婦感のコミュニケーションが重要であると考えられる。先行研究や予備調査から、夫婦間コミュニケーションは父親の育児ストレスを低減することが示されている。妻から要求された育児行動を父親が自分の意思で行うことができれば、妻からの期待による「させられている」という意識が減り、うまくいかなかった時の受け取り方が変化すると考えられる。夫婦で育児について会話し、父親が今何をすべきかを考えて育児参加することが重要だと考えられる。

VIII. まとめ

父親の育児参加と育児ストレスとの関連について、本研究では、父親は育児参加による育児ストレスは感じることも場面によってはあるが、それはその場面だけであり、全般的には肯定的感情が強く存在しており、育児全体で考えるとストレスを感じていないのだと考えられる。

また、父親の育児ストレスを考える上で、父子関係だけでなく、妻も含めた3者関係の視点から考える必要があることが本研究からは示された。父親の育児行動は、全てが自発的なものとは限らない。本研究の面接で語られているように、育児の主な担い手は母親であるという意識は妻の就労に協力的な共働きの父親にも存在している。そのため、父親はサポート役として育児を行い、妻からの要求のあった育児行動もすることになる。つまり、父親の育児には、父親が自発的に行う育児と、妻から要求された育児の2種類があり、妻から要求された育児ではストレスを感じることはあるのではないか。今後父親の育児参加に焦点を当てるにあたっては、育児行動そのものだけでなく、そこにある父親の意識も考慮する必要があるだろう。

VIII. 今後の課題

本研究では父親の育児を質的に研究したが、本研究の目的上、父親の条件をかなり統制した。肯定的感情による育児ストレス低減と同時に、育児参加の時間も育児ストレスに影響しているのではないか。予備調査を含め、4人中3人の父親は帰宅した時には子どもが寝ていることが多く、平日に子どもと接する時間がほぼ無い。そのため、育児の中心は母親であり、ストレスを感じるほど育児に関わっていない(休日のみなど)可能性がある。面接からは、「面倒は妻が見てくれる」「(子どもは)母親がいなくなったら大変」といった語りが得られている。「楽しい」と感じる育児行動が父親によって異なることが面接で語られていた。今後は、子どもの年齢や子どもの数、帰宅時間、職種といった、様々な条件の父親に対して質的研究を行い、検討する必要がある。

父親の育児行動には自発的な育児と妻から要求された育児の2種類が存在しており、どのような育児行動を父親は自発的に行うのか、それぞれの育児行動に対する父親の意識はどのようなものかについて焦点を当てることにより、父親に対するより良い育児参加を促すための要因が示されるだろう。

主要引用文献

- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎 1999 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観, 子ども観:父親の育児参加との関連 発達心理学研究 10(3) pp.189-198
- 冬木春子 2005 乳幼児をもつ父親の育児ストレスとその影響—父親と子どもの関係性に着目して— 家族関係学 24 pp.21-33
- 井上孝代 1998 カウンセリングにおけるPAC(個人別態度構造)分析の効果 マクロ・カウンセリング研究 3 pp.43-51
- 岩藤裕美 2005 親への移行期における夫婦間コミュニケーションの変化—夫婦親密性及び育児ストレスとの関連から— 家庭教育研究所紀要 27 pp.91-101
- 加藤邦子 2004 男性における仕事と育児の両立要因—充実感を持つためのモデルの検討— 家庭教育研究所紀要 26 pp.110-127
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 2002 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響:社会的背景の異なる2つのコホート比較から 発達心理学研究 13(1) pp.30-41
- 森下葉子 2006 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究 17(2) pp.182-192